

# P11 菅原道真の上陸地周辺の海岸段丘による平安時代の瀬戸内海海水準

## The sea level of the Seto Inland Sea in the Heian Period using the coastal terraces around the landing site of Sugawara Michizane

木村隆行 (エイト日本技術開発)

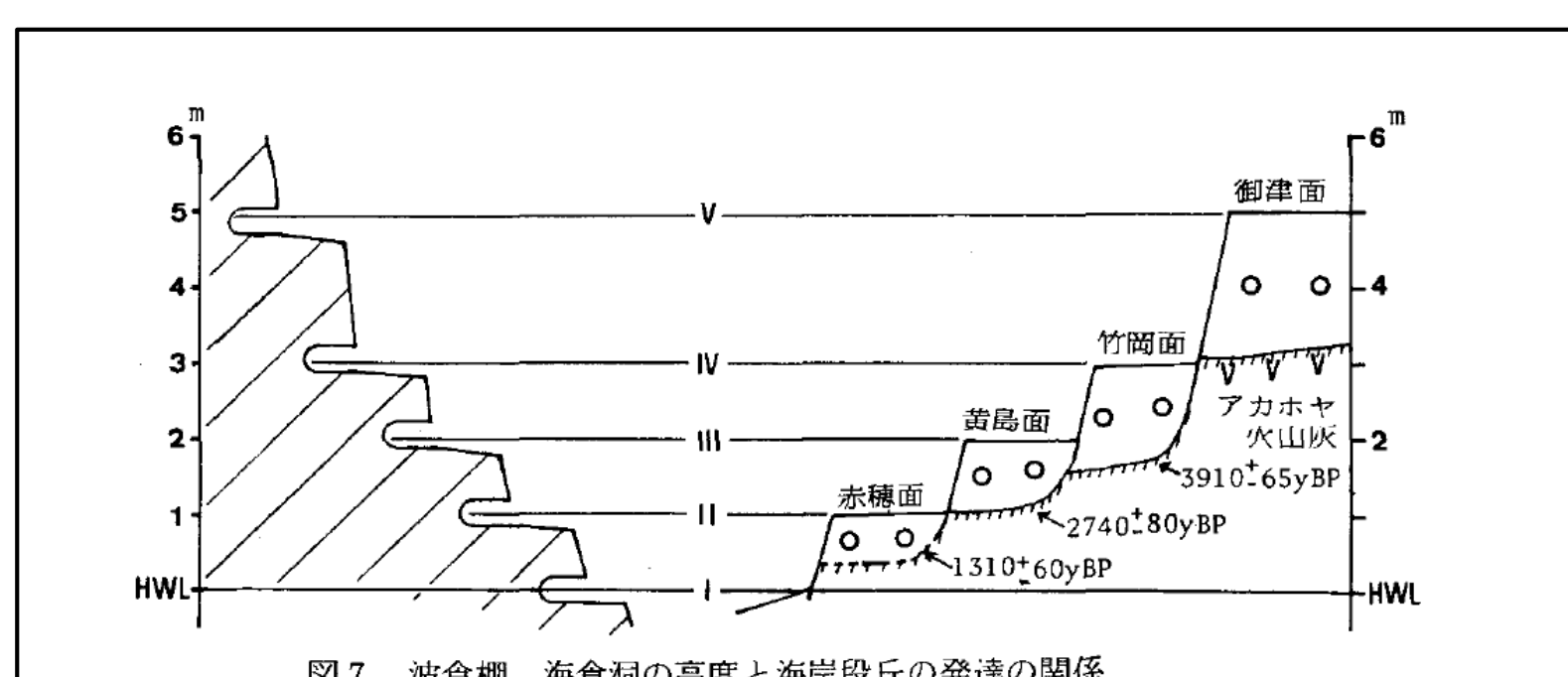


図7 波食棚、海食材の高度と海岸段丘の発達の関係

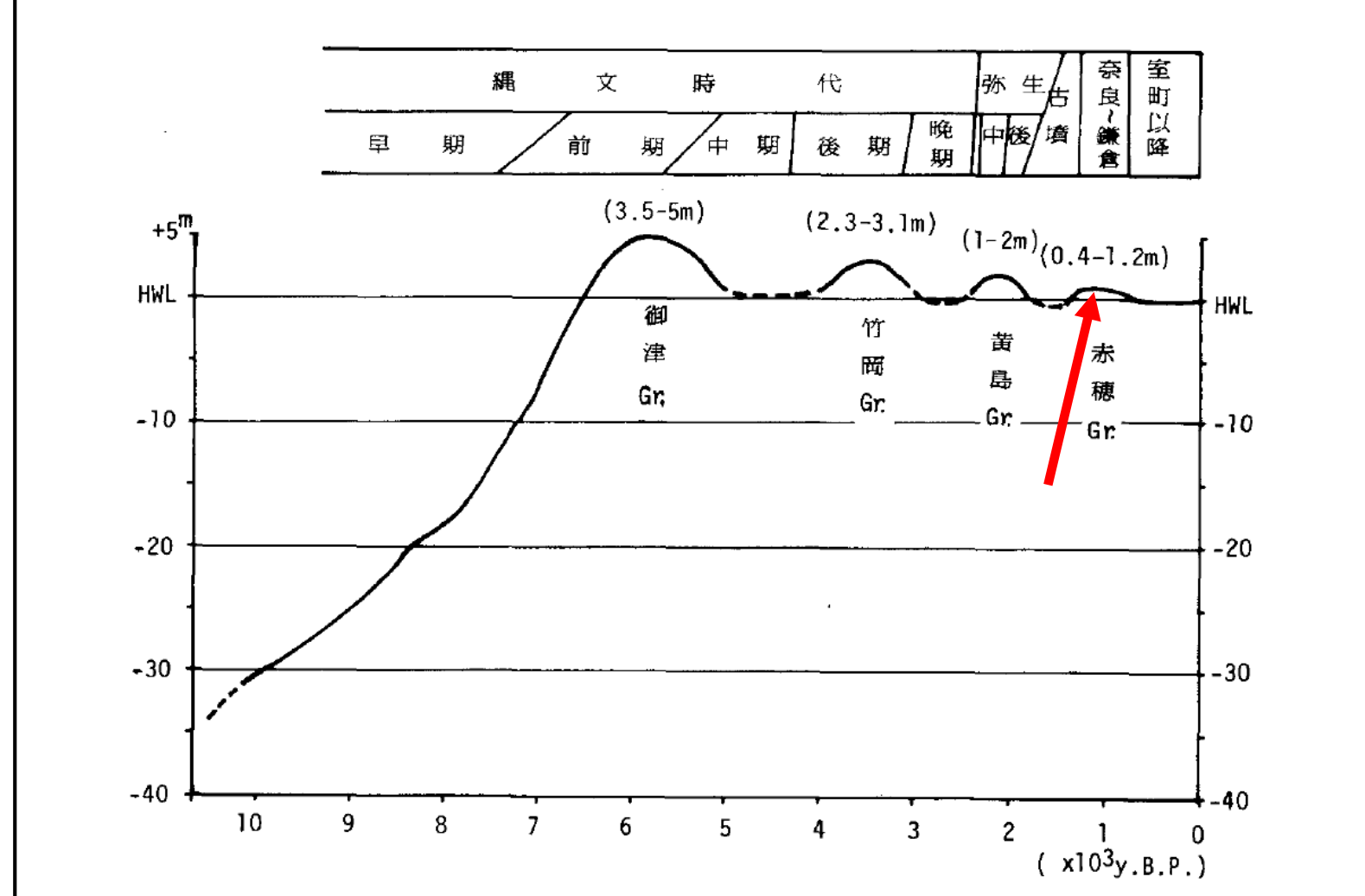


図8 播磨灘にみられる完新世の相対的海水準変化  
注) 10,000-6,000 y.B.P.の曲線は前田(1980)による。

(図-1)1985 成瀬「瀬内海、播磨灘沿岸における完新世後期の海水準変化に関する資料」播磨港HWL46cmから+0.4~1.2m

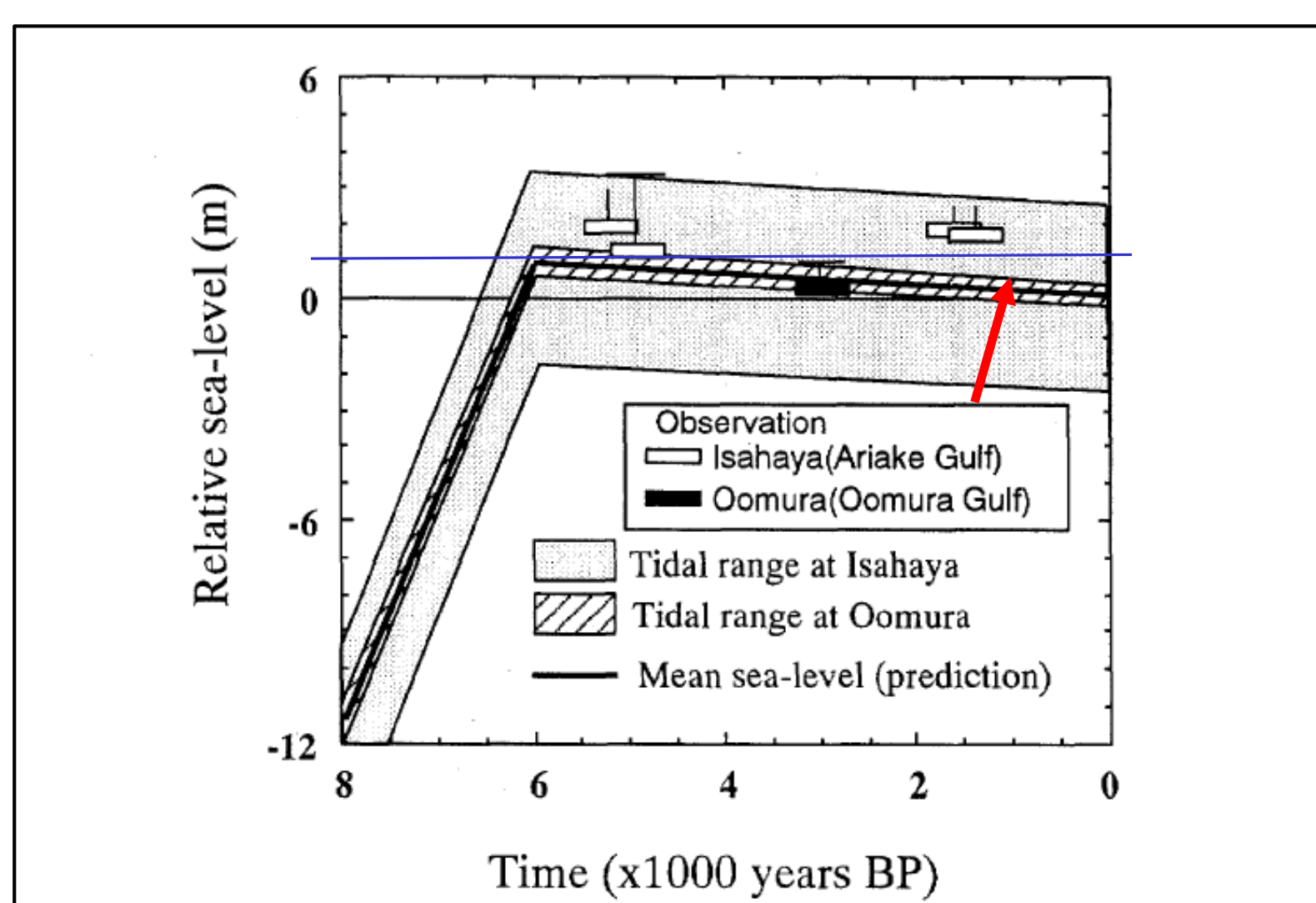


図7 大村(大村湾側)と諫早(有明海側)における海成層の上限高度とその年代値、および海面変化の計算値

(図-2)1994 中田「ハイドロアイススタシーと西九州の水中遺跡」縄文の海進も1m以内 1000年前は50cm以内?

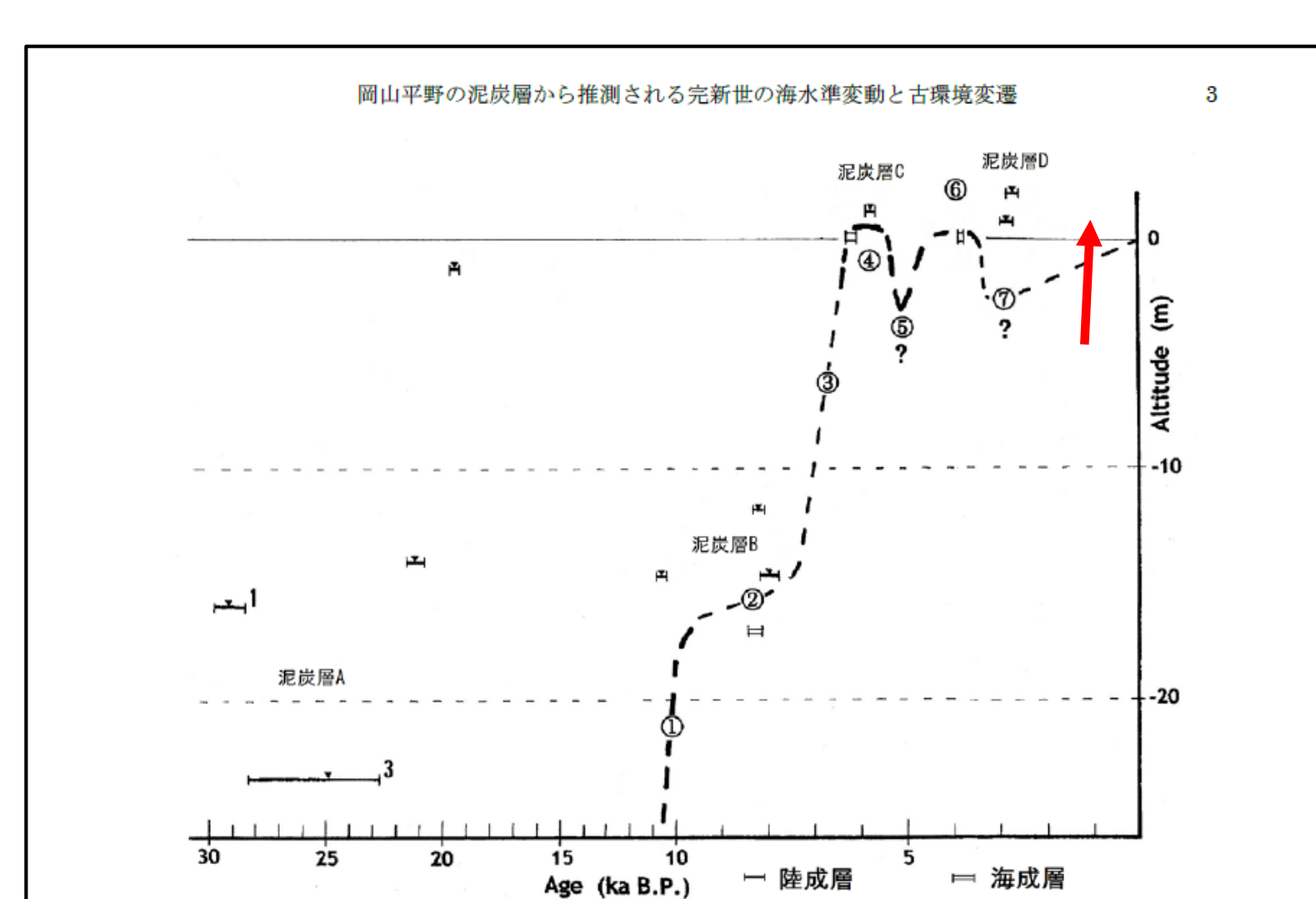


図3 岡山平野の泥炭層から推測される完新世も海水準変動と古環境変遷  
図解 岡山平野における相対的海水準変化と古環境変遷。その資料が陸成か海成かを区別し(鈴木, 2004)これによって推定した海水準を併せて示した。

(図-3)2014 鈴木「岡山平野の泥炭層から推測される完新世も海水準変動と古環境変遷」1000年前は不明

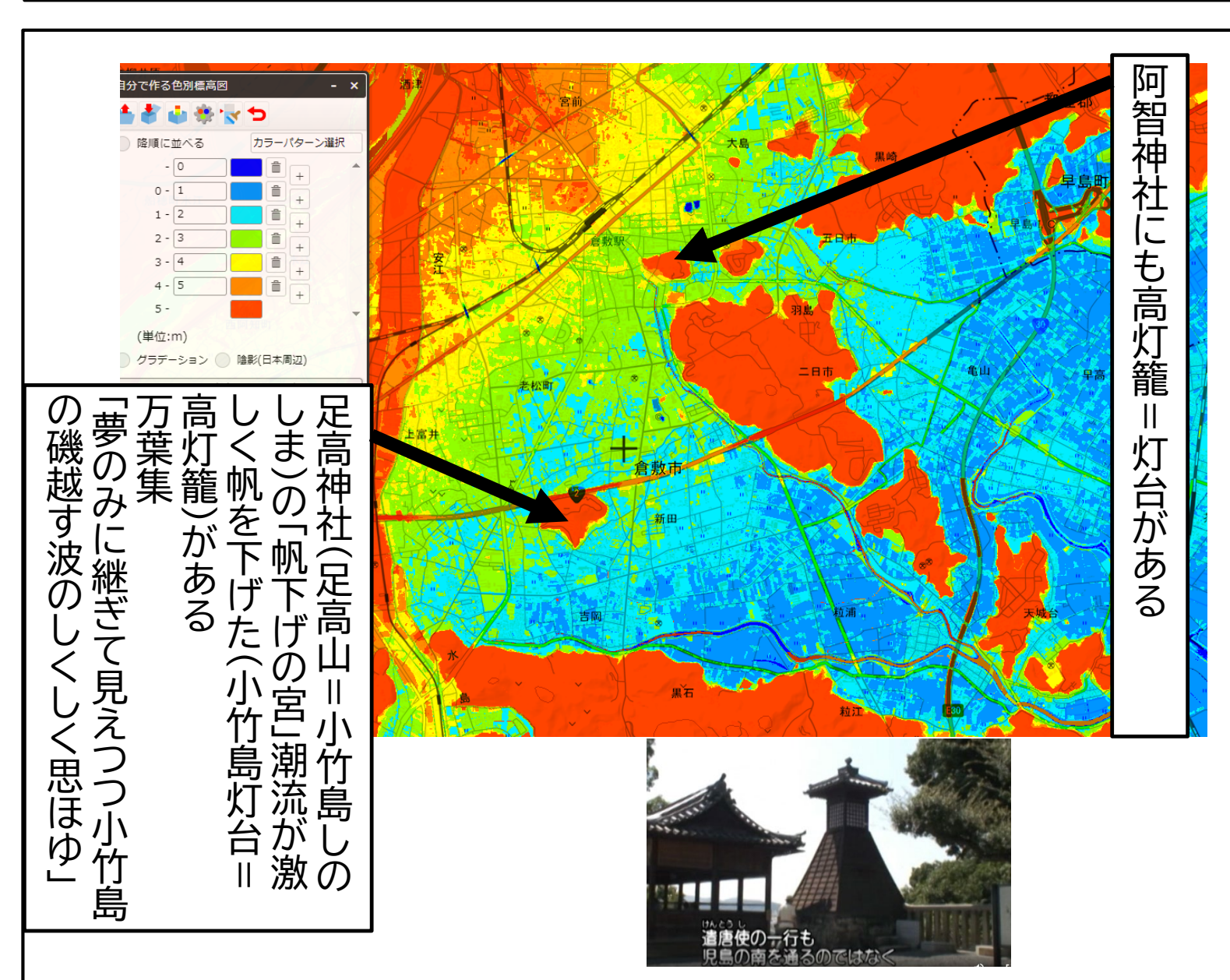
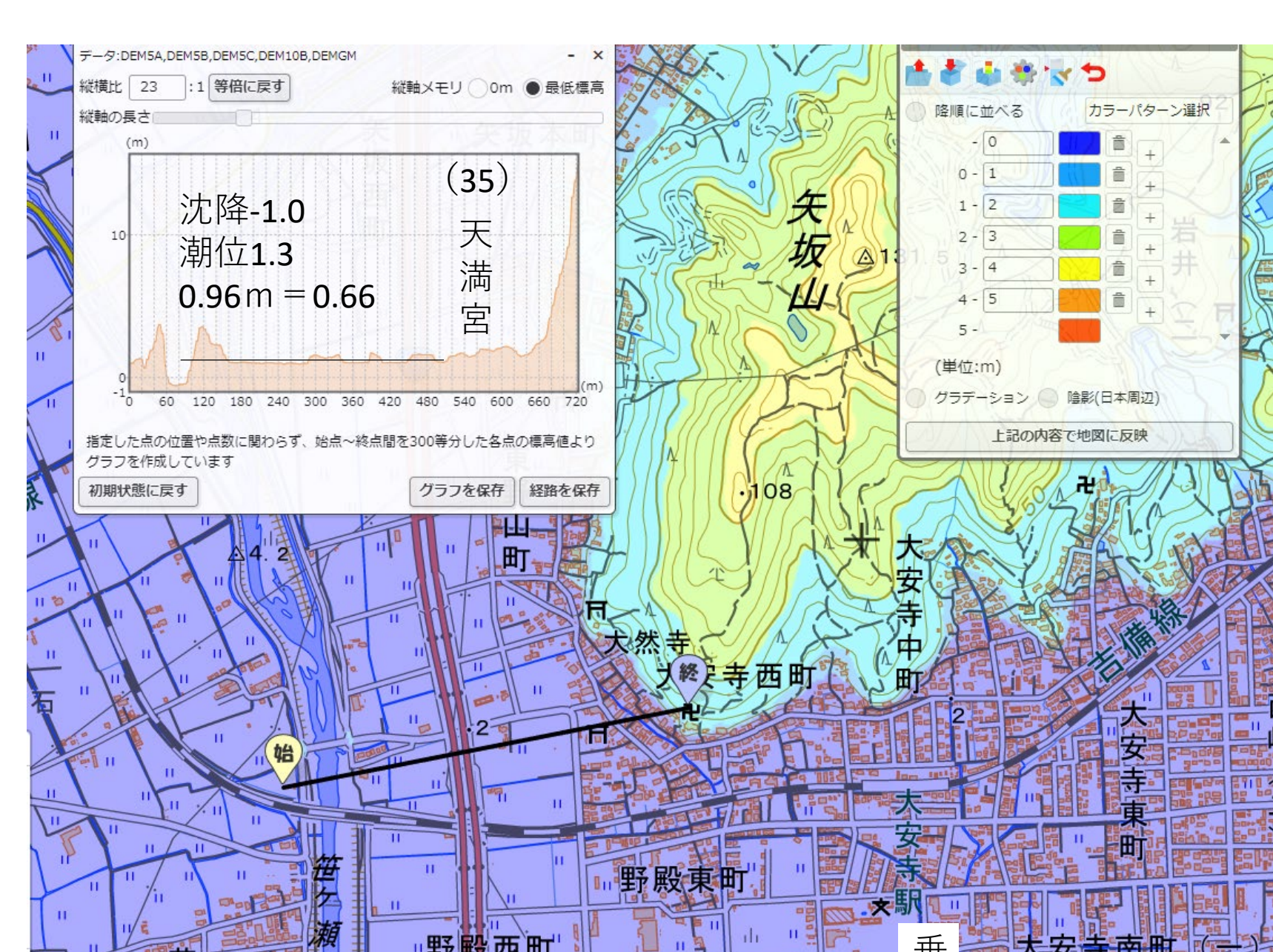


図4 吉備の穴海(岡山県立図書館 郷土情報ネットワーク)では高灯籠=灯台の存在と 遣唐使も通過する重要な海路があることを記載

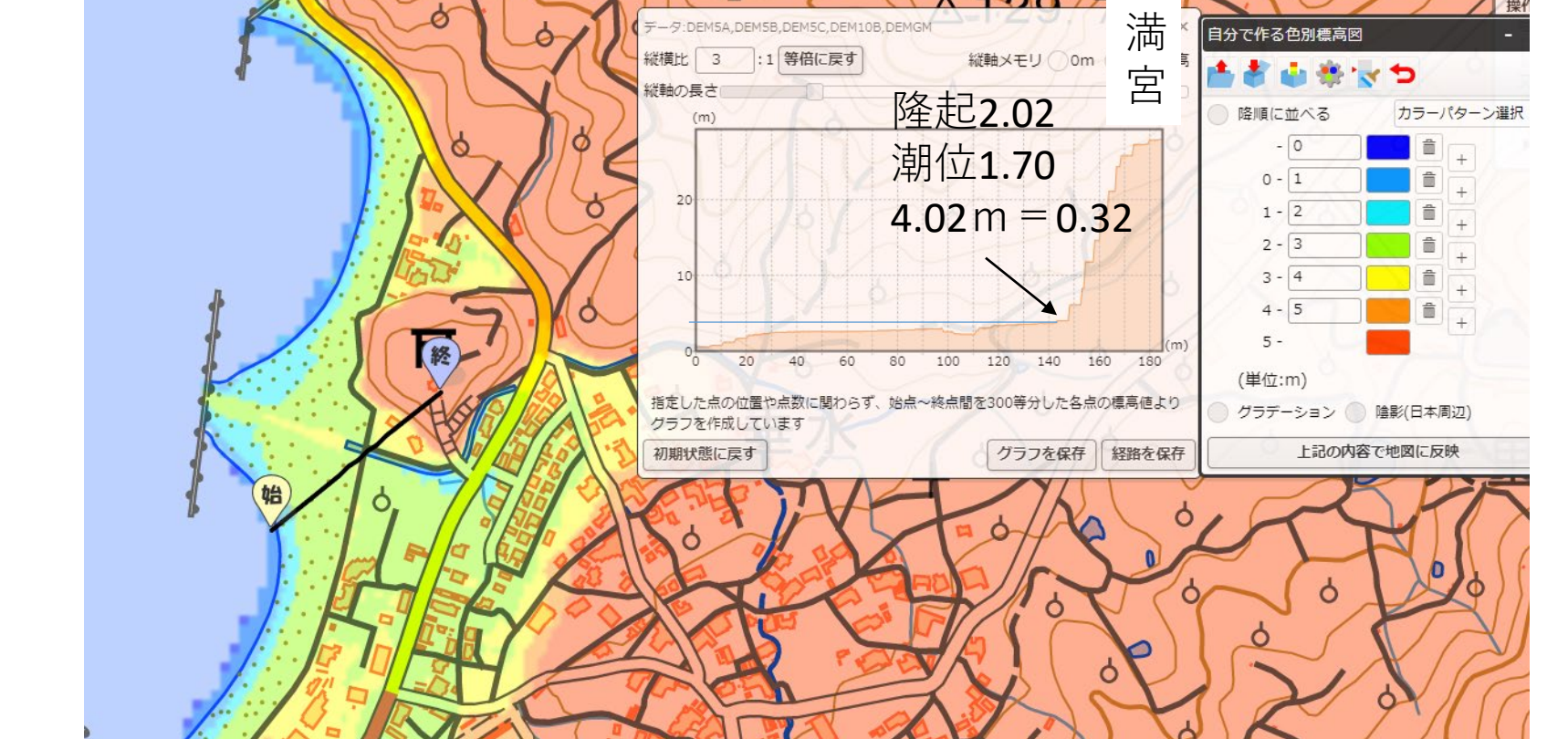
高灯籠=灯台の位置から、平安時代、現在のTP3m付近までが、吉備の穴海の海面であった可能性が考えられる。



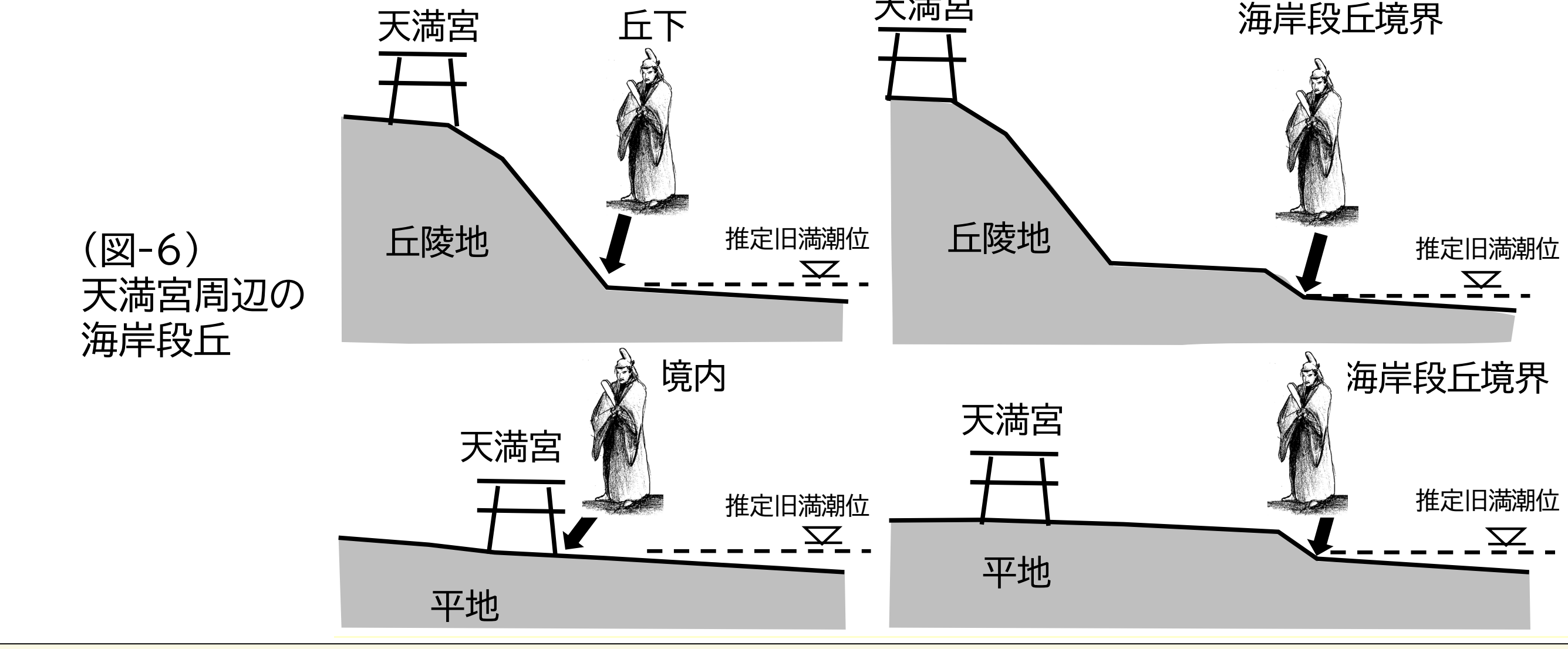
図5 吉備の古墳も、吉備の穴海周辺に分布する  
古代吉備王国の謎(真壁忠彦、真壁良子著、新人物往來社 p118)より



(図-7) 天満宮 事例 大安寺

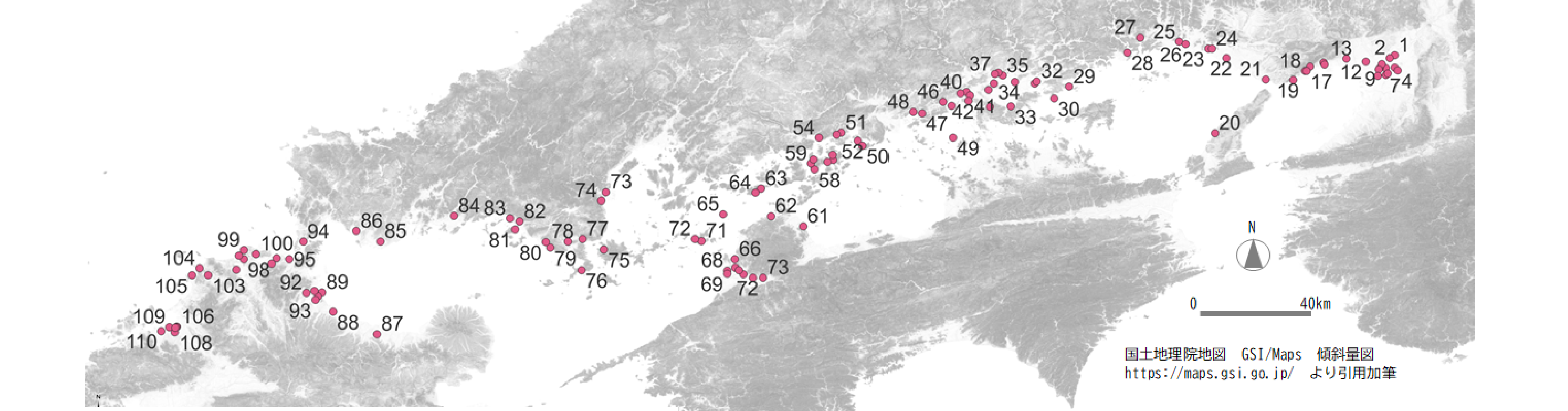


(図-8) 垂水天満宮 事例

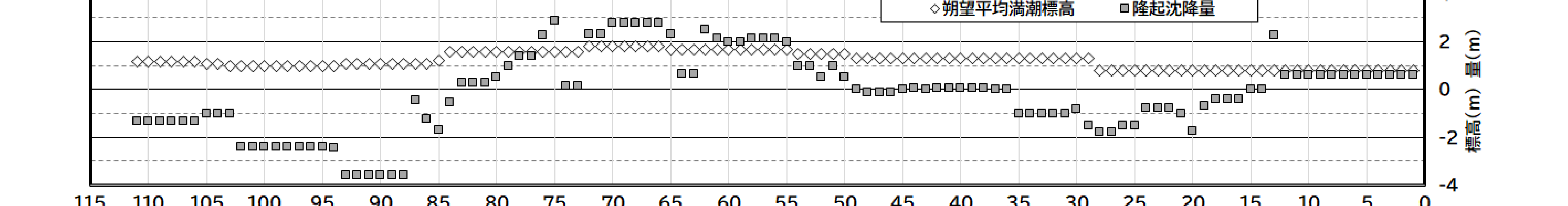


(図-6) 天満宮周辺の海岸段丘

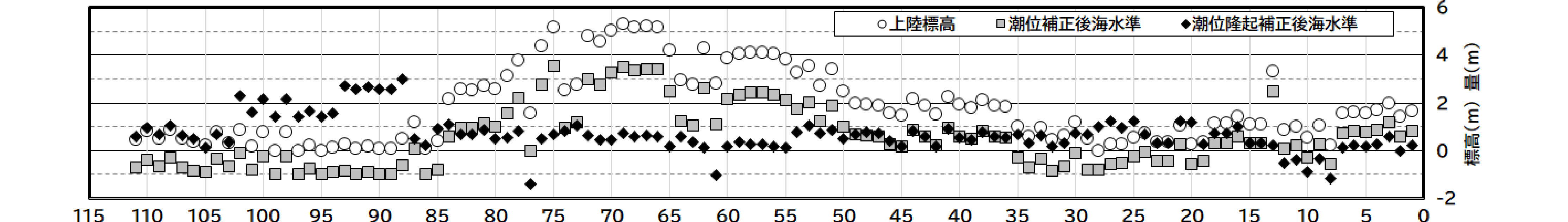
(1) 菅原道真が寄った伝承のある天満宮を確認し、その動線上にある伝承未確認の古い神社を含め、111箇所の天満宮を抽出。その天満宮周辺で上陸したと仮定し、周辺の海岸段丘面を設定。丘の天満宮であれば、丘下もしくは近接する海岸段丘面の境界を上陸標高と仮定。平坦地であればその境内もしくは近接する海岸段丘の境界を上陸海面と仮定。  
(2) その地点の朔望平均満潮標高を、近接地点(気象庁 <https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/tide/genbo> による2006~2010データ)から推定した。  
(3) 局所の隆起沈降量は、近接地点(国土地理院 <https://mekira.gsi.go.jp/index.html> による2012~2023の10年間の垂直変動量の100倍)の1000年間の変動量を推定した。



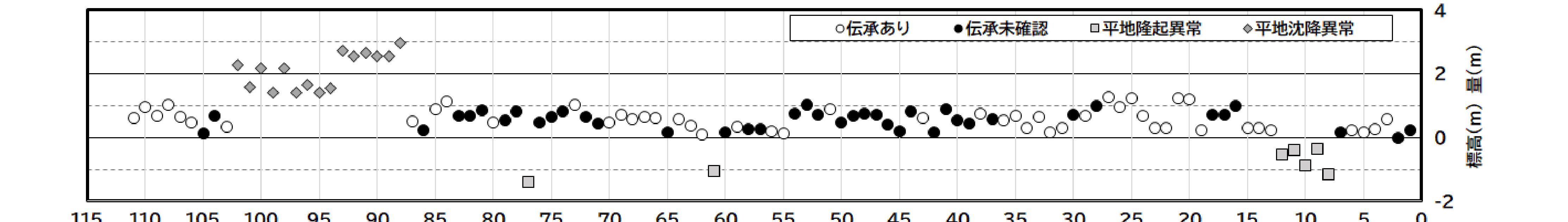
(図-9) 111箇所の天満宮(天満神社・菅原神社等)



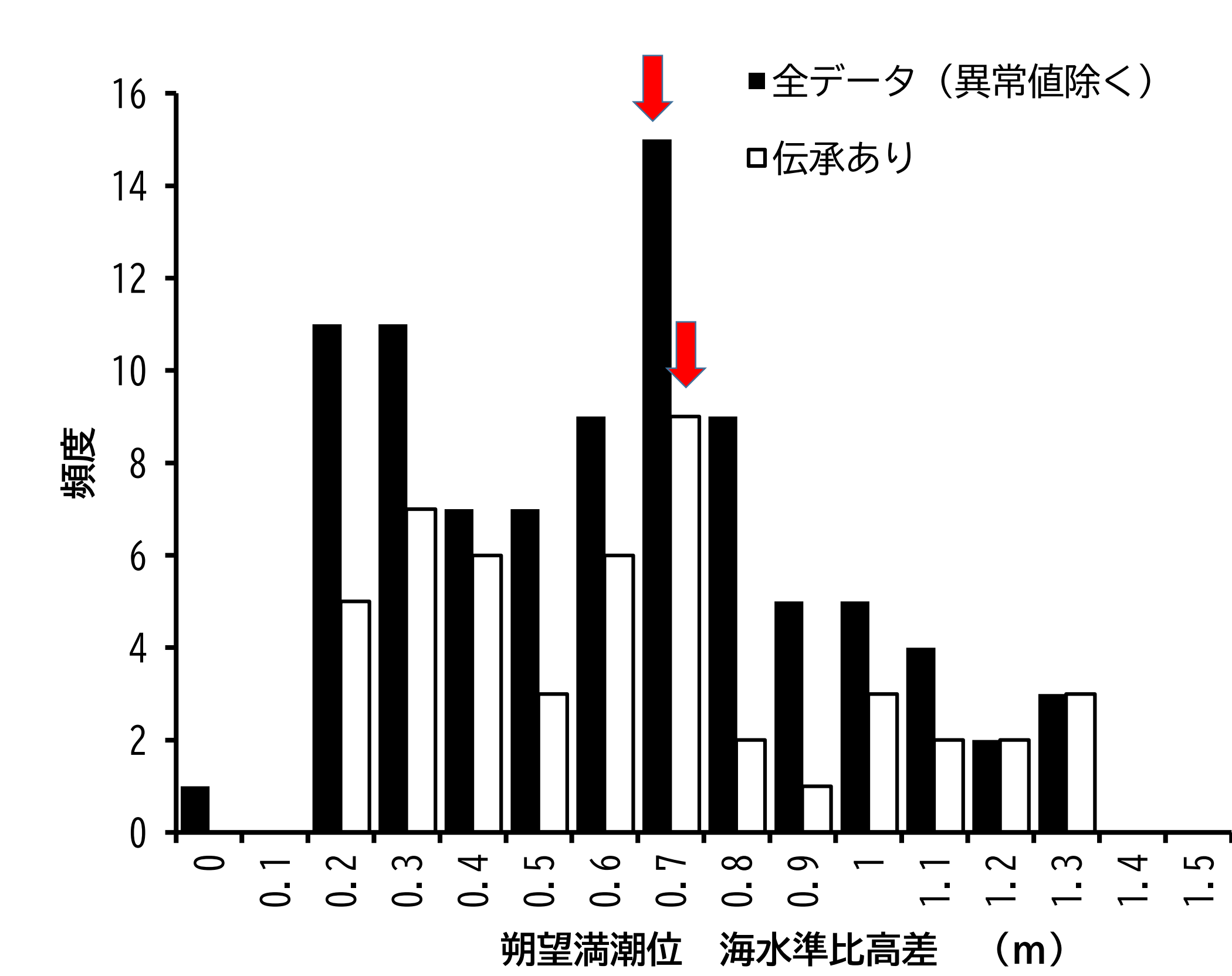
(図-10) 111箇所の朔望平均満潮標高と隆起沈降量



(図-11) 111箇所の上陸標高(海岸段丘境界)と各補正後の満潮位の差



(図-12) 111箇所の隆起満潮位補正後の現満潮位からの平安時代満潮位の差



(図-13) 現満潮位と平安時代満潮位との差

(1)現在の朔望平均満潮位を基準に、想定海岸段丘境界標高と1000年の隆起沈降量を補正し、平安時代と現代の満潮位の差を集計した。上陸伝承ありも、上陸伝承なしを含む全データも、最多頻度は+0.6~0.7mである。可能性としては、平安時代の満潮の海水準は、現在の満潮位より+0.6~0.7m程度高かった可能性が想定される。  
(2)岡山平野には「吉備の穴海」があり、菅原道真も「吉備の穴海」の沿岸に上陸したと考えられる。仮に+0.7mとすると岡山の満潮位TP1.3m沈降0~-1mとすればTP2.0~3.0mが平安時代の吉備の穴海の満潮位になる。  
これは、倉敷にある旧灯台(高灯籠)の分布(足高神社・阿智神社)とも一致し、万葉集に詠まれた小竹島の磯越す内容、「小竹島=足高神社(帆下げの宮)の前の磯は、潮流がはげしく、波がしくしくと押し返すように、あなたのことを思っている」という記載にも一致している。  
おそらく、901年、菅原道真も、この足高神社の高灯籠をみながら、波に揺られながら通過していったであろうと、推定される。